2011 年 11 月 26 日 **分科会カテゴリ D（教育）**

# テーマ：地元学と地域社会

**宇都宮大学・中村ゼミ　成澤友里　田崎亜季　中村佳代**

## １　なぜ地元学か

この提案のきっかけは、私たち自身が、自分たちの住んでいる町のことをよく知らないというところから始まった。そこで、調査を進めると、全国にはすでに地域のことを知るための様々な学問が存在することがわかった。しかし、各地元学を見ていくとある問題点が見えてきた。それは、学んだ地域のことを他者に発信する機会が少ないこと、また、市民講座の一種として地元学が開講されていることが多いのだが、各講座間に関連性が見つけられず、成果を街づくりに生かしづらいことである。私たちは、その問題点を解決できるような新たな地元学の可能性について提案したい。

具体的には、各市町村別の大学で「地元学」という公開講座を開講する。地元学の習得を「学び」「共有」「発信」の３つのステップに分け、それを経ることで住民がただ知識を学ぶだけでなく、学んだことを生かすことのできる場を提供する。また、科目は「みず学」「もり学」「農業学」「伝統工芸学」「商店学」「まつり学」「特産品学」の７つを用意し、それぞれの科目に関連性を持たせることで、様々な視点から見た地域を発見しやすくした。講師を市役所職員、市民、大学生の三者が担うのも本提案のポイントである。

本提案における地元学とは、生涯学習・社会教育の実践として市民が学び、発展させていく学問である。これを学ぶことによって、住民の地域に対するアイデンティティが高まり、街づくりの動機づけになることが期待される。これは、地域課題の新たな切り口を発見し、地域をより深く知るための足掛かりとなるような提案である。

なお、本稿では地元学について、吉本哲郎氏の定義を採用する。

吉本氏は「地域から変わる日本　地元学とは何か」のなかで、次のように述べている。

「地元の人が主体になって、地元を客観的に、地域外の人の視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することを第一歩に、外から押し寄せる変化を受け止め、内から地域の個性に照らし合わせ、自問自答しながら地域独自の生活を日常的に作り上げていく知的創造的行為である」[1]。

本稿では、住民が地域独自の生活文化を伝承し、創造していくことに、地元学の目的を置く。

## ２　地元学の今

### １）地元を市民が学ぶことに関する現状

① 生涯学習センターなどの公共施設における取組

私たちは全国で行われている地元学の全体像をつかむため、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州の八地方の取り組みを調べた。この際、数を絞り込むため、八地方の中で人口が多い場所を選び出し、各都道府県の公共施設で行われている講座の内容、開催頻度、情報発信の仕方に注目した。

参照した HP は、北海道の「さっぽろ市民カレッジ[2]」、東北（宮城県）の「みやぎ県民大学[3]」、

---

1　吉本哲郎「地域から変わる日本　地元学とは何か」社団法人農山漁村文化協会『2001 年現代農業増刊号』p195.

2　さっぽろ生涯学習センターHP「ちえりあ」http://chieria.slp.or.jp/seminar_college/about.htm（2011 年 10 月３日付）

3　宮城県教育庁生涯学習課 HP「みやぎ県民大学」http://www.pref.miyagi.jp/syougaku/kenmin/（以上同様閲覧日）

関東（東京都）の「すみだ学習ガーデン[4]」、中部（愛知県）の「生涯学習 web ナビなごや[5]」、近畿（大阪府）の「ひがしおおさか編集局[6]」、中国（広島）の「広島安東公民館[7]」、四国（愛媛）の「愛媛県大学[8]」、九州（福岡）の「学び i(アイ)福岡[9]」である。

| 団体名 | 運営者 | 講座特徴 | WEBでの活動報告の情報公開 |
|---|---|---|---|
| さっぽろ市民カレッジ | さっぽろ生涯学習センター | 市民講師による講座豊富(月に100以上) | 3か月毎の生涯学習情報誌をアップ |
| みやぎ県民大学 | 宮城県教育庁生涯学習課 | あらゆる公共施設を利用 | 県政便りなどの広報紙の一部アップ |
| すみだ学習ガーデン | 特定非営利活動法人 | IT向上事業、プラネタリウム運営 | 毎月情報誌をアップ |
| 生涯学習webナビなごや | 名古屋市生涯学習推進センター | 地元の自然資源や文化などネット配信 | 講義をHPで動画配信するなどネットで学べる |
| ひがしおおさか編集局 | YKコンピュータ | ラグビーなどスポーツイベント目立つ | 講座のチラシを募集し、一覧にまとめている |
| 広島市安東公民館 | 広島市未来都市創造財団 | 趣味に合わせた講座目立つ | 活動報告はないが予告内容あり |
| 愛媛大学 | 教育学生支援部教育企画課 | エネルギーを考える公開講座 | 活動報告はないが活動状況の写真あり |
| 学び i(アイ) 福岡 | 福岡市教育委員会生涯学習課 | 人材バンク(講師リストアップ) | 市政だよりをアップ |

**図表1　講座の特徴（著者作）**

これらの活動で共通していることは、地域を知る学問として長期にわたって深く掘り下げていく講座の少ないことである。また、講座の特徴も様々で、それぞれの地域にあった学問を確立しきれていないことが挙げられる。

さらに一部を除き、講座の回数や成果も分かりづらく、外に向かった情報発信も十分ではない。

② 学校での取り組み

文部科学省の小学校指導要領[10]により、小学校の社会科では、３、４年生になると住んでいる地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や安全を守るための諸活動を理解する。

その後、５、６年生から中学生の間では、日本や世界に関する地理、歴史、政治の働きを学び、国際社会における日本の役割を理解できるようにする。

また、公立中学校の約 90%以上のところでは職場体験が実施されている[11]。これにより、子供たちが働くことの尊さや社会のためになることを積極的に行う意識や、地域住民全体が子どもを育てる意識を高めている。

---

4　特定非営利活動法人 HP「すみだ学習ガーデン」
http://www.sumida-gg.or.jp/garden/A04/yumeno/A04-yume1.html（2011 年 10 月 3 日付）

5　名古屋市生涯学習推進センターHP「生涯学習 Web なごや」
http://www.suisin.city.nagoya.jp/index.html（以上同様閲覧日）

6 YK コンピュータ HP「ひがしおおさか編集局」http://www.w-higa.com/（以上同様閲覧日）

7　広島市未来都市創造財団「安東公民館」
http://www.cf.city.hiroshima.jp/yasuhigashi-k/index.htm（以上同様閲覧日）

8 教育学生支援部教育企画課愛媛大学 HP「公開講座」
http://www.ehime-u.ac.jp/society/open_lecture/detail.htm(以上同様閲覧日)

9 福岡市教育委員会生涯学習課 HP「学び i(アイ)福岡」http://gakushu.city.fukuoka.lg.jp/event/（以上同様閲覧日）

10 文部科学省「小学校指導要領 第２節　社会」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shuppan/sonota/990301b/990301i.htm（2011 年 11 月 3 日付）

11 文部科学省「第１章　職場体験の基本的な方考え方」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502/026/001/001.htm（以上同様閲覧日）

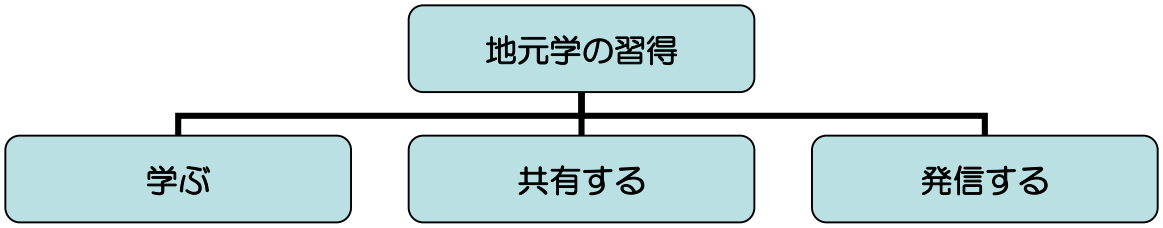
### ２）課題

小学生の場合、社会科や総合の時間で地域のことについて学べるので、地域の理解を得る機会に恵まれているようである。しかし、発表の場がクラス内でとどまりやすいため、地域全体で知識を共有できない。

大人の学び方の場合、既存の学び方では、講座間の関連性が見つけられず、内容も重複していることが多い。よって、授業で見つけた地域の資源を地域全体へとつなげる広い視野を持ちづらい。市民の各々で市を学ぶことはできているが、そこから一歩踏み出して、市民がビジョン（どんな市としたいかという目標）を持てるようにつなげなくては、街づくりは空回りしてしまうだろう。継続的に市民が集まり、話し合ったうえで、それを発信するべきである。

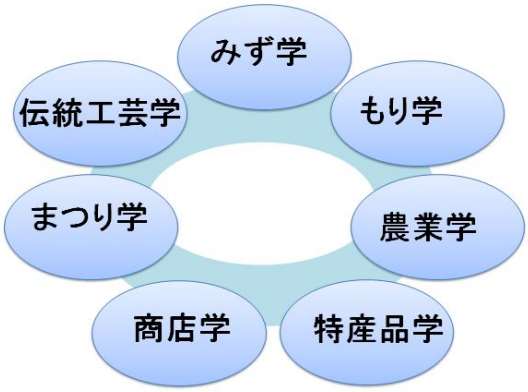
## ３　一歩進んだ地元学にするために

これらの課題を踏まえ、私たちは行政と大学、市民が一体となり、街づくりに生かせる新たな地元学について提案したい。地元学を習得には、次の３つのステップが必要であると考える。




**図表2　地元学の習得（著者作）**

### ステップ１：地元を学ぶ




**図表3　学問同士の連携（著者作）**

大学で「地元学」という公開講座を開講し、講座の科目は複数用意する。

対象者は小学５・６年生から大人までとし、週に一回学習する。小学５・６年生以上を対象とする理由は、小学３・４年生で社会について学んだことが下地にあるからである。また、小学３・４年生以下ならば、地域のよさに触れることの方が重要であると考える。

地域の大人と子供がともに学ぶことで地域的な連携が強化される。

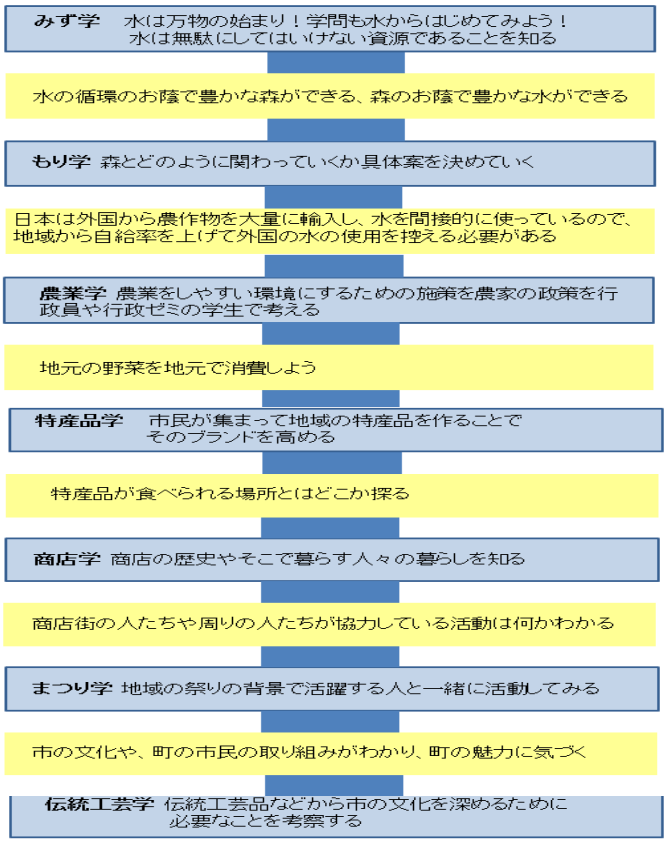
講師は市民、市職員、大学教授、学生が担う。

単発での市を学ぶ取り組みは各々すでに行われているが、取り組みはひとつの分野を知ることだけで終わらないようにすることが大切である。そのために、図表３のようにそれぞれの学問が関連性をもつことで地域的視野が広がる。図表４は図表３のつながりを詳しく説明したものである。

以下で、各学問の具体的なカリキュラムを作成するため、私たちが住んでいる宇都宮市で学問を開講する場合を考える。

宇都宮市では「みず学」、「もり学」、「農業学」、「商店学」に近いものはすでに小学校や生涯学習センターなどで教えられているが、「特産品学」に餃子、「伝統工芸学」に黄鮒（きぶな）という伝統工芸品をあてはめられる。

なお、以下のカリキュラムを作成する際、宇都宮市役所の学校教育課の方や、国際交流プラザの方に地元学の現状をインタビューし、その内容を参考にしている。




**図表4　地元学のつながりの一例（著者作）**

**①みず学**

**カリキュラム：家で飲んだり使ったりしている水は、どこから来てどこへ行くのかを探る**

**写真1. 田川**[12]

現在、世界人口の増加、農業の発展が淡水の消費を飛躍的に増加させ、水が不足する状態が世界各地で発生している。日本は島国なので水不足は深刻に考えられていないようだが、食料などの輸入を通じ間接的に大量の水を使用していることもあり、無関係な問題ではない。地域ごとに持続可能で最適な水循環を構築するための取り組みの必要性が指摘されている昨今、地域から世界的課題に取り組むことが必須だ。

水を何も考えずに享受する姿勢を改めるために、水学では、下水道局に行って自分の地区はどこの川からきてどこへ行くのか経緯を調べ上げる。

その際、大人と子供が参加し、上下水道局や環境部環境政策課などと街に出かけることで、より専門的な知識を共有し、水に関する意見を出し合う。

12 しもつけふるさと写真館「No.008 田川」（2000 年 4 月 26 日撮影）
http://www.shimotsuke.co.jp/select/furusato-photo/machinami/20100603/331186（2011 年 10 月 22 日付）

②もり学

**カリキュラム：森で合宿講演会を行い、どのように関わっていくか具体案を決める**

現在、森林の荒廃化が懸念されており、森林の持つ多面的機能を維持するために人工林の手入れをしながら次世代の森づくりにつなげていくことが課題である。

宇都宮市では現在、自主的に森づくりを行う森林ボランティアを育成するための森林整備教室を森林公園で開催している[13]ので、その活動を活かして、自然科学の研究者の方なども交えながら、森づくり施策の概要を深く知るべきである。

**写真2. 宇都宮市森林公園の赤川ダムと古賀志山[14]**

③ 農業学

**カリキュラム：農家体験して、農業をしやすい環境にするための施策を考える**

農家の人に農業の楽しさ、大変さや、これからの農業に対する展望を知るために、実際に農業体験を行う。この際、経済部農業振興課の方などと一緒に、農家を守る為の具体策を市民で考える。

**写真3. 宇都宮市の野菜[15]**

④ぎょうざ学

**カリキュラム：なぜ餃子の街になったのか、餃子の歴史を学ぶ**

**餃子で街づくりするとはどういうことなのか考える**

**イラスト1. スタミナ健太[16]**

全国的ブランドとなった「宇都宮餃子」の取り組みは 1990 年、宇都宮市役所職員の提案から始まり、次第に民間主体の活動が活発化し、独自のキャンペーン活動や、商工会議所との連携を図りながら、知名度を上げていった。1996 年に商工会議所が空き店舗対策事業の補助金による実験店舗「おいしい餃子とふるさと情報館・来らっせ」を開設し、宇都宮餃子会メンバーの店舗が出店するなどの動きを見せている。

小学生のうちから、こういった餃子の街づくり施策の数々を調べ、街づくりでできることはなにか大人たちと話し合う機会を設けることで、地元の理解が深まる。

---

13 宇都宮市 HP「森林整備教室のご案内」
http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/nogyo/nougyotaiken/002125.html（2011 年 11 月 10 日付）

14 宇都宮市 HP「宇都宮市森林公園」
http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/shinrin/shinrinkouen/index.html（2011 年 10 月 22 日付）

15 宇都宮市 HP「うつのみや地産地消推進店を募集します」
http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/nogyo/19322/017465.html（以上同様閲覧日付）

16 宇都宮餃子館 HP　http://www.gyozakan.jp/（以上同様閲覧日付）

⑤ まつり学

カリキュラム： 宇都宮で行われている祭りとその由来を知る

写真4. 春渡祭り[17]

宇都宮市では、春渡祭（１月 15 日）、節分祭り（２月３日）、宇都宮城桜祭り、田舞祭など様々な祭りやイベントが執り行われている。それらは何故はじまり、どのような目的を持って行われているのか、知っている人はどれだけいるだろか。祭りとはその街の独自色の強い文化であり、地域を知るにはうってつけである。また、観光者が多く集まるのも祭りの特徴といえる。市街の人が積極的に足を運びたくなるような祭りの PR 方法などを学ぶのも面白いだろう。

⑥商店学

カリキュラム：商店街の歴史と工夫を探る

写真 5. オリオン通り[18]

大型スーパーやデパートなどが続々と出店し、商店街はその煽りを受けている。商店街は様々な工夫を凝らし、買い物客を楽しませている。

商店街の工夫を知るために実際に商店の手伝いをしたり、宇都宮オリオン通り商店街振興組合の方に話を伺う。

商店街が元気でなければ市内全体が勢いを失ってしまう。そうならないために、商店街にお客を呼ぶにはどうしたらよいのか、受講者で話し合う。

⑦ きぶな学

カリキュラム：きぶなとは何かを実際に作りながら学ぶ

写真6. きぶな[19]

各都道府県の工芸者を取り巻く環境は、後継者不足や需要の減退など年々激しさを増しているが、このまま衰退していっていいのか疑問である。

伝統工芸品を実際に作ったり、伝説に基づく絵本を作ったりするほか、経済部商工振興課の方などを講師に、伝統工芸品とはどんな存在なのか考えることから地域の文化を知ることに発展させたい。

また、鮒を食べていた世代の方や、食糧制裁を受けていた歴史にまで話を膨らませることもできる。その際、日米関係を研究する大学教授を講師とし、農業学やみず学へとつなげていく。

---

17 宇都宮市 HP 「年間イベント情報（2011 年度分）」
http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kanko/event_kanko/nenkanevent18.html
（2011 年 10 月 23 日付）

18 オリオン通り HP TOP 画面
http://www2.ucatv.ne.jp/~u-orion.snow/（以上同様閲覧日付）

19うつのみやの伝統工芸「黄ぶなについて」
http://www.ueis.ed.jp/kyouzai/sinden17/kibuna/kibuna.html（2011 年 10 月 22 日付）

### ステップ2：地域を共有する

各科目で自分たちが学んだことを、他の科目を選んだ人にわかりやすく伝える。その際、発表方法などは指定せず、各科目の参加者でグループワークを行い、発表のために話し合ったり、共同で発表準備を行うことでコミュニケーション能力の発達を目指す。

大人の場合はこれに加え、より良い街をつくるための街づくりについて話し合う。地元学を学んだ経験が街づくりに生かされるはずである。

### ステップ3：地域の魅力を発信する

#### ① 内外に向けて情報を発信

市民の目線から見た地域の魅力をパンフレットや新聞、WEB に掲載するなどの形で市の内外に向けて発信する。

住民に向けては、パンフレットを市役所や公共施設などに置いてもらい、手に取ってもらう。そのほかにも駅の観光案内所やアンテナショップなどに置き、市外の人に地域の素晴らしさについて知ってもらうことで、観光客の増加を狙う。

#### ② 地域交流に生かす

県外出身者や外国人と、市民が学んだ地元学を使って交流を図る。

具体的には、文化交流イベント大学で開催し、その中でお互いの地域について紹介する。イベントのコーディネーターは大学生が担い、学生も多数参加してもらえるような広報活動を行う。

各グループが工夫を凝らした発表を行い、地域の差異や共通性について話し合うことで、お互いの文化を認め合い、また、自分の文化的機軸を確認することが狙いである。

## ４　行政および大学の役割

地元学を学ぶにあたり、予算の提供を行う。また、講座開講の際の広報活動や講師の役割を担う。例えば、伝統工芸学の場合は経済部商工振興課、みず学の場合は上下水道局といった具合に、それぞれの学問と関係深い部署の職員が担当する。

参加者が作ったパンフレットを市役所に置いたり、地元学で学んだことを WEB に掲載するなどの情報発信の役割や、イベントへの積極的参加についても行政は協力する。

また、地元学を開講するに当たり、コーディネーターとなって、講師である市民・行政と受講者をつなぐパイプ役となる。地元学には様々な学科があり、エキスパートである市民や行政の担当者も各々異なっている。それらの調整役となるのが大学生である。

また、イベント開催の際には、大学内での広報活動は学生が積極的に行う。

## ５　地元学が目指すところ

本提案では、地域を知ることはもちろんとして学んだことを発信し、より多くの人々にその魅力を知ってもらうことを目指す。さらにそれを街づくりに生かし更なる魅力を創造する。

まず、グループワークを通じてコミュニケーション能力を高める。ここで岩手県葛巻高校の例を挙げる。この高校では、「くずまき地元学」が平成 14 年度から行われており、講座の１日目にフィールドワーク（集落点検）、２日目にワークショップ（まとめ作業）を実施している。その中で生徒たちは「地元なのに知らないこと」に気付く以外に、相手を理解する力が身についたとい

う[20]。

今後は、留学生や県外出身者との交流を通して、様々な差異を発見し、それを認められる人間になってもらいたい。同じ日本の中でも様々な文化があり、多種多様な差異がある。ましてや外国と比べればなおさらである。お互いの地域を紹介し合うことでその差異に気付き、認めることで、物事を多角的・多面的にとらえることの出来る人間育成を目指す。こうしたコミュニケーション能力こそが国際社会で活躍できる人間の求められている能力である。

また、街づくりに積極的に取り組み、地域を更に良くしようという意識を持つためのきっかけづくりになるような学習の場を提供する。街づくりとは自分の街を知ることから始まる。各地域では、市民がより快適に、充実した暮らしを送れるような様々な取り組みがなされている。何か不便なことがあった時や新しい取り組みを市に提案しようとするとき、その多くは既に行政によってなされているだろう。実際、私たちが本提案書を書くにあたって、宇都宮市の現状を調べたところ、素晴らしい政策がすでになされていることがわかった。そのうえで、さらなる地域の発展を要望するのなら、まず私たちの街のことを知らなければならない。地元学を学ぶということをきっかけにして、街づくりに関心を持ってもらうことができるだろう。

最後に、地域に愛着を持つことで、市民に積極的にその魅力を発信してもらいたい。この提案の中心は、学んだ知識を内外に向けて発信することにある。せっかく学んだ地域の素晴らしさを市民の内だけでとどめておくのはまさに「もったいない。」しかし、それを他県や外国から来た人、さらには別の県に向けて発信することで、すでにその地域に住んでいる人はずっとこの街にいたいと思うかもしれない。他県の人はその地域に観光に来たいと思ってくれるだろう。

本提案を実現できればこのような目標が達成できると考えられる。

## ６　地元学の課題とこれから

現在ある地域を学ぶための講座は、内容に重複が見られる。そのため、いくつか講座をまとめて整理する必要がある。地元学に一体感を持たせることがこの提案のポイントなので、地域コミュニティセンターや生涯学習センターなどと協力して、今までの講座、イベントとは違う点を市民に広報していくことが課題である。

本提案の特徴は、子供から大人までをターゲットとし、専門家を講師として積極的に招くことで、宇都宮市のビジョンを考え、それに向けてアクションを起こしやすい環境に整えたことである。それを強調して市民に訴える。

さらに、市を学ぼうとする自発的な意欲が市民にあるかという課題がある。自発的に学ぶ意欲を発掘するため「地元学」という勉強ブームを巻き起こす。より深い学びを共有する場であること、学んだ先に、宇都宮市に反映される意見が生まれることを魅力として伝えていきたい。

前述したとおり、各地域には様々な魅力があり、それらは他地域の人にも充分誇れるものである。これらの魅力を市民が学び、積極的に活用することで、さらに魅力的な街に発展することが出来るだろう。私達が提案する地元学はその手助けとなるものである。

しかし、私達が提示した地元学の具体例はほんの一例に過ぎない。住民ならば、さらに多様な街の特長といえるものを知っているに違いない。

地元学は成長していく学問である。住民が自分の住む街の長所を探すことで、街と共に発展していく。学び、発信することで街の魅力に初めて気づくことができる。それはやる気になればどこでも、いつでもはじめることができる。

それぞれのやる気が地域によい影響を及ぼすという実感を持つことを、行政が手助けする仕組みが整えば、間違いなく地域の魅力はさらに高まる。

---

[20] いわて地元学事例集「総合的な学習の時間に地元学を」
http://www.aiina.jp/environment/digieco/kankyou_jimoto/jimoto/05jissen/index06.html
（2011 年 10 月 20 日付）